

戦時期における農村託児所の研究 ——「津田子供の家」の設置と活動を中心にして——

金 慶玉

はじめに

日本で最初の託児所は1890年に新潟県に設立された。託児所は貧困児童を「母親の労働時間内」に「委託」し、「乳幼児」を「保護」することが主な目的であった。1920年代には社会事業の下で救済的な役割が求められるが、昭和恐慌と東北大飢饉以降の1930年代には農村更生事業として、季節託児所を含む農村託児所が奨励された。この時期の農村託児所は社会事業の一環であったが、慈善と救済より農村隣保と教化を基にする児童保護施設でもあり、農村経済保護の機関でもあった。しかし、戦時期には、食糧や農産物を増産し、確保するため、農村の労働力不足対策として農村託児所が盛んに設けられた。それは単に農繁期における労働力の補給という消極的な性格ではなく、労働力の持続的な保全と恒久的な生産力拡充のための積極的な性格を帯びていた。このように戦時期の農村託児所は、戦時厚生事業として食糧増産に励みながら農村の児童を保護・育成して労働力を補給し、維持する戦時託児所の役割を果たしていた。1924年には、農繁期託児所を含む季節保育所が全国で48ヶ所、常設保育所が147ヶ所であったが、1944年にはそれぞれ50,320ヶ所、2,184ヶ所に増加した。この数字からもわかるように、託児所は国策との関係の中で急増していた。しかし、農繁期託児所の増加は一方的な上意下達ではなく、地域の需要と一致した結果であったことも看過できないと考えられる。

本稿は、1937年から1945年までの総力戦体制期の農村における、託児所を中心とする地域と学校との関係を分析することを目的にする。その事例として、津田英学塾が1939年10月に開所し、1945年4月末まで運営した託児所「津田子供の家」の設置と運営・活動、および小平という地域における託児所の存在の意味を明らかにする。

小平は当時の北多摩郡に属する畑作地帯の都市近郊農村である。1923年の関東大震災後、津田英学塾や東京商科大学の移転による学園地区が形成され、純農村から都市化への第一歩が始まった。日中戦争とアジア太平洋戦争期には、国家の戦時開発政策により多数の軍事関連施設が建てられ、都市化という言葉がぴったり当てはまるほど、以前とは全く違う軍事都市の面貌を現すに至った⁽¹⁾。この時期、小平の人口は1937年の7,200人から1944年には15,595人と倍以上にまで激増するが、1944年の女子100人に対する全国の性比が90.1人だったのに対して、小平のそれは117.5人で、戦時期にも拘わらず男性の人口が女性の人口よりはるかに多い現象が見られた⁽²⁾。しかし人口が急増したにも拘わらず、幼稚園や託児所など保育施設は「津田子供の家」⁽³⁾以外には一ヶ所も無く、1945年1月15日

に設置された小川戦時託児所も、同年6月には空襲と子どもの疎開などを理由に閉鎖される。食糧増産に励んでいた一般の農村とは異なり、都市近郊農村であった小平という地域では、総力戦に伴い軍事化が進んだため、「津田子供の家」の性格も、戦時色を帯びていく小平の変化を体現した。これを考えると、託児所「津田子供の家」は単なる一ヶ所の農村保育施設にとどまらない意味を持つ。

同時期の「津田子供の家」に関する先行研究は、残念ながら〈小平市史〉に簡単に言及されているだけである。戦時託児所全般について見れば、東京における幼稚園が戦時託児所へ転換した二つの事例を紹介している矢治夕起の研究が挙げられる⁽⁴⁾。矢治は江戸川双葉幼稚園と杉並区の井草幼稚園の事例を通して、幼稚園から戦時託児所への転換の実態を示すとともに、戦時託児所の基準がどの程度厳格に守られるかは、園長の保育に対する考え方次第であったことを指摘している。

次に託児所と地域との関連性を考えると、渡邊洋子⁽⁵⁾と田澤薫⁽⁶⁾の研究が挙げられる。渡邊は、日本で初めて託児所が設立された新潟県の季節託児所を例として紹介している。地域の行政関係者以外にも、社会事業協会⁽⁷⁾と県内の諸機関・組織、特に仏教関係団体と愛国婦人会などが实际的に季節託児所に関与し、地域的展開を行っていたことを述べている。田澤は、1933年三陸に大津波が発生した時、民間児童施設の育児院が宮城県と共同で被災地に臨時託児所を設け、地域に貢献し、社会的に評価を高めたことを述べ、1946年以前の児童施設は施設運営者の私的財産や寄付によって運営されていたので、その分、施設長に施設運営や諸般措置に関する権限があり、その場の状況に合わせた実践が可能であったことを指摘している。児童福祉法が制定された1946年以降は、施設運営の経常費用の一切を公費で賄うようになり、その結果児童の施設への入退所は行政の判断に委ねられることになった。

しかし、このような先行研究には戦時期における農村託児所に関する分析も、同時期の託児所をめぐる地域と学校とを視野に入れた記述も見当たらない。だが、上でも述べたように、「津田子供の家」は戦争の最中に民間で設置され、地域唯一の保育施設として機能し、農村から軍事都市化するという特殊性を持った小平の変化をそのまま反映している。それは、「津田子供の家」の存在期間が小平の軍事化が進んだ時期と重なっていることからわかる。何よりも、津田英学塾は戦争を背景に、戦争勝利を目指す国家の要求に応じて任意科目となっていた英語の専門学校であったため、生き残りをかけて選んだ熾烈な戦時期の歩みが「津田子供の家」とも深く関係する。こうした意味で、「津田子供の家」の研究は、女学校がどのように戦争に巻き込まれ、銃後を支えて協力の道を歩んでいったのか、また戦争が一般国民の生活と社会の基底にどれほど入り込み、地域をどのように変化させていったのか、その実態をうかがう手がかりを提示できると思われる。本稿では、津田英学塾の同窓会が発行した『会報』と〈小平市史〉などの資料をもとに分析する。

1. 戦時期の保育状況

1) 戦時期の保育政策

1937年7月に日中戦争が勃発すると、日本政府は1938年4月に「国家総動員法」を公布し、日本全国に戦時体制を確立・強化してゆく。国民は戦時体制の中で、女性や子どもまで耐乏生活を強いられるようになる。女性は国の資源として、子どもは次世代の「皇国民」として捉えられ、その分、女性の出産と保育という家庭内の問題が、国家の未来と関連する国策に組み込まれた。1941年1月に厚生省は「人口政策確立要綱」を発表し、「出生増加」と「死亡減少」を当面の目標として掲げる。当時、乳幼児の死亡の主な原因は先天性弱質・下痢および腸炎・肺炎であった⁽⁸⁾。これは妊産婦の栄養状態とも関係があり、衛生や保健の意識の不足とも大きく関係していた。政府は生産力拡充と人口政策を成功させるため、早婚と多産を奨励し、子どもと母親の栄養状態を改善し、共同炊事場や託児所を設置した⁽⁹⁾。また女性の労働動員のためにも、育児と保育の重要性はさらに注目を集め、戦時保育では「戦時下の家庭教育の不足を補い、乳幼児保育の万全を期すること、家族をして職務に挺身させ、生産力の増強に寄与」させることが意図され⁽¹⁰⁾、それに伴い保育施設は「国民幼稚園」や「戦時託児所」と称されるようになる。

しかし、託児所の保育を担当する保姆の不足で、子どもの保護以外に家庭教育の不足を補うことが出来ず、また保健婦がいる施設が「極めて少ない」ので、衛生や保健の改善などが保育施設の急務として捉えられた⁽¹¹⁾。東京都は保姆の不足を補うために、「保育所従事者の必要性に鑑み、十九年度において三ヶ月を単位とする保姆養成機関を設置し、一期二百名を収容し、一ヶ年八百名を」養成する計画を立てた。これ以外にも、「廃校する女子各種学校等のなか、約二十校」を「保姆学校に転換する」⁽¹²⁾ようにした。

当時文部省下で教育を保育の中心とする幼稚園は、1944年4月に出された東京都の「幼稚園閉鎖令」により、幼稚園としての保育事業を休止するか、あるいは戦時託児所に転換するかが求められ、やむを得ず戦時託児所として引き続き運営する場合もあった。その例は、先行研究で挙げられた矢治の研究からもわかる。この時期「生産増強」に寄与する戦時託児所のみが保育施設として認められるが、1945年3月10日の東京大空襲により、同年6月から幼児疎開も行われ、戦時託児所も全面的に休止することになる。

2) 戦前の小平村と保育所の状況

小平は東京都の多摩地域にある市で、江戸時代に新田開発が行われ、形成された集落地である。1920年代までの産業は養蚕と農業、主要作物は野菜や麦、稗、^{ひえ さつまいも}薩摩芋などで、1910年代からは東京市への野菜や果物など農作物の供給地となった。しかし蚕糸産業の不況に伴い、桑畑は農作物の畑に変わり、アジア太平洋戦争末期には東京中心部からの買出しと児童疎開が盛んに行われる地域となった。1889年に町村制が施行され、本来の小川村と新田が小平という名とともに新たに小平村となり、1890年の人口は4,489人、1910年に

は5,618人で、昭和元年の1926年には6,054人と徐々に増加していく。1923年の関東大震災後には、前述のように津田英学塾（現津田塾大学、1922年12月新校地購入、1931年9月移転）や東京商科大学（現一橋大学、1933年9月移転）などが移転し、また1928年からは東京市の近郊として人口増加に対応するため、宅地開発と観光開発を目的にする多摩湖鉄道が開通した。1930年代からは通学する学生も加わり、朝夕はラッシュであったという⁽¹³⁾。

ところが戦時開発により、東京市近郊の小平に大きな変化が現れる。総力戦関連施設が国により強引に建てられ、その過程で一方的な土地買収交渉が行われて農地を失った農民は小作人に転落し、農業を持続するのが難しくなり、軍需工場など軍需産業の労働者に転業した例もあった⁽¹⁴⁾。次々と建てられる総力戦施設で働く労働者を収容するため、1943年には、戦時経済の必要から国家的統制の下で1941年に設けられた特殊法人営団による営団住宅が設立された。また農地を失った農民の中には「納屋や養蚕小屋を改造して、軍関係者に間貸しをして生計を立てる」場合もあった⁽¹⁵⁾。村の変化を反映するがごとく小平の人口は急激に増え、1944年には15,595人を記録した⁽¹⁶⁾。その大半は、昔から農業を営む者と新しくできた軍事施設で働く者、また出征兵士などからなっていた⁽¹⁷⁾。同じ戦時期であっても、農業だけを営む一般農村は食糧増産のために共同作業・共同炊事が課題となっていたが、それとは異なり小平は、都市近郊農村として軍事施設建設にともなう外部からの男性人口の増加とともに、地域の産業も農業から多様化していくという特殊性を持っていた。

それでは、日中戦争以前の小平の保育の状況はどうであったのか。戦後、新しく定められた児童福祉法の下で保母になり、小平市福祉部主幹を歴任した玉木直^{なお}（1932-）は「津田子供の家」が小平の「集団保育のルーツ」だと述べている⁽¹⁸⁾。その通り「津田子供の家」の設立以前の小平は、幼稚園はおろか、託児所さえ一つもない農村であった。戦時以前の小平の子育ては、祖母や親戚のような血縁関係を利用して子どもを預け、また子どもが自分より小さい子の子守りをしていた。子どもの母親である嫁は「昼は農作業、夜や農閑期は繕いものや縫いものなど手仕事に追われ」ていて、実際の子育ては祖母が担当し、子育てにおける「主導権」も祖母にあった⁽¹⁹⁾。また、当時子育てに関するドイツのフレーベル Friedrich Wilhelm August Fröbel（1782-1852）のような外国の教育家の新しい理論や、幼稚園に限らず託児所の保育にも大きく影響を与えていた倉橋惣三（1882-1955）の幼児保育理論などは、小平村における子育てとは全く関係がないことであった⁽²⁰⁾。

2. 「津田子供の家」の設置と運営

渡邊は新潟県を例に挙げ、行政関係者以外にも社会事業協会と県内の諸機関・組織、特に仏教関係団体と愛国婦人会などが実質的には託児所の運営に関与し、地域的展開を行ったと述べた。渡邊の指摘の通り、一般的に農村託児所は、地域の行政機関をはじめ社会事

業協会とキリスト教や仏教・神社などの宗教団体、または愛国婦人会のような婦人団体や女子青年団によって運営されることが多かった。こうした地域民中心の団体により建てられた保育施設は最初、農民からの要請もあって季節託児所から出発するが、農民の婦人会や女子青年団などにより、地域に受け入れられて常設託児所になる場合もあった。東京女子師範学校（現お茶の水女子大学）や十文字高等女学校（現十文字中学・高等学校）などは、同じ文部省管轄の対象となる幼稚園を設立して運営している。しかし、「津田子供の家」は津田英学塾が設立した託児所で、文部省ではなく厚生省の管轄である。この節では、託児所の設置と運営を中心に、なぜ幼稚園ではなく託児所だったのかという問いを念頭において運営主体と運営方法を検討する。

1) 「津田子供の家」の設置

小平は陸軍や軍需関係施設の建設を背景に人口が増えていたが、それが農村地域で必要とされる農業労働力ではなく、軍事施設に所属する人口の増加であったため、戦線に向かう地元男性の代わりに銃後の部隊を担う女性の役割が大きくなっていった⁽²¹⁾。津田英学塾も、「農村の不足勝ちな人手を補つて、直接生産に従事する人々の負担を少しでも軽減し、併せて幼少な人達の生活をいささかなりとも文化的に幸福に指導する」⁽²²⁾という目的を持って託児所を設置する。『津田塾会四十年の歩み』では、「今後の物資、とりわけ食糧の確保のためにも地域農村との関係をよくしておくことがいっそう必要」だと考え、「農村の人々に役立ち喜ばれる施設として託児所の建設」を急速に具体化したと述べられている⁽²³⁾。

「津田子供の家」は、津田英学塾の学友会と同窓会の「共同事業」⁽²⁴⁾であった。津田英学塾の同窓会は、1939年という時点まで「事業らしい事業などをして居なかつた」ので、「津田子供の家」の設立計画は「空前の試み」と言えるほど意味深い企てであった⁽²⁵⁾。しかし、建築費や設備費など多額の費用がかかるこの計画は、簡単に実現できるわけではなかった。また、学友会は毎年一回の映画会または観劇会を開催して、塾生徒の奨学金基金のため、純益を寄付してきた。ところが1937年には、例年と違って体育館建築という目的が定められていたにも拘わらず、夏休み直後の役員会では満場一致で、「傷病兵慰問のため」へと目的を変更した⁽²⁶⁾。同年12月、日本青年館で開かれた映画会の純益1,700円は陸海軍に献納し、翌年6月開催の映画会の純益1,190円余は、「銃後奉仕の重要部門を僱ふ」⁽²⁷⁾二葉保育園などの社会事業団体に寄付した。1937年の時点から、学友会の活動も「戦時体制に切り替えられてゆく」⁽²⁷⁾ことがわかる。また映画会の純益を社会事業に寄附していることから、1938年6月までは、まだ託児所設置計画がなかったことが推察できる。

しかし、学友会は「小平村に託児所が、まだ一つも無く、農村では、人手が減り不自由をして居られる」⁽²⁸⁾との判断から、1939年6月10日に軍人会館にて映画会を開催し、純益約1,900円を託児所建設費として支出する。同窓会も1,000円を支出し、合計2,900円余が建築費として使われた。建坪70坪の土地は学校側から提供され、東京府からは社会事

業の一環として補助金 1,200 円が支援され、工事が始められた⁽²⁹⁾。またオルガンや蓄音機・ラジオ・玩具・絵本、黒板、丸テーブルなどの内部設備は、『会報』にそのリストを載せて、不用品や使用済みのものなどを寄付するよう会員に呼びかけた⁽³⁰⁾。このようにして 1939 年 10 月に開所した託児所は、「二十坪の遊戯室をはじめ、保育室、保姆室、医務室、炊事場、足洗場」⁽³¹⁾などが備えられていた。

当時、村の役場を通して、「津田こどもの家子供募集」のビラを配ったところ、申込人員は九十人を越えた⁽³²⁾という。募集要綱は次の通りである。

定員 八十名

時間 四月から九月まで 午前七時半より午後五時まで

十月から三月まで 午前八時より午後四時まで

月謝 一ヶ月一人あたり二十銭又は田畑に出来るもの

(例えば、お米、お芋など) 事情によつてはなりません。

昼飯 お弁当をお持ち下さい。農繁期は副食物をあげます。⁽³³⁾

定員 80 名を募集しているのに 90 名を越えるほどの申し込みがあったのは、午前 9 時に始まり午後 1 時に終わる一般幼稚園とは違う、農村の実情にあわせた受託時間と、一人当たり 20 銭又は田畑に出来るものという低廉な月謝などが小平村民の心を動かした結果だと考えられる。これは、朝原梅一^{うめいち} (1888-1959) の指導と関係がある。1939 年 11 月の学友会が書いた『会報』第 48 号によると、朝原は東京府社会事業協会の主事として「津田子供の家」を建設当時から指導しており、二人の保姆も直接紹介して働かせていた。朝原は 1931 年の「託児事業の特質」で、「託児所が昼間働きに出る家庭の幼児を預つて両親に安心させて働かせるためには、朝早く、労働に出る前から預つて、一日の労働を終わつて、夕方帰つて来るまで」⁽³⁴⁾という、幼稚園とは異なる託児所の保育時間の必要性を強調している。「津田子供の家」の朝 7 時半という子どもの登所時間は、働く母親のため設置された戦時託児所本来の機能に従っていたのだ。また、保育料においても、当時は幼稚園が 3 円ないし 5 円が普通で、託児所は「日納は三銭乃至五銭」であり、「月納は一円乃至一円二十銭が一番多い」⁽³⁵⁾とあるが、「津田子供の家」の場合は月謝が「一人あたり二十銭又は田畑に出来るもの」だったので、一般の農村託児所より保育料がさらに低かったことがわかる。それでは、このように、安い保育料をもって果たしてどのように託児所運営が可能であったのか、次に見ていきたい。

2) 「津田子供の家」の運営

託児所を開所してから一ヶ月が経った 1939 年 10 月 1 日、託児所委員会は、戦時物価高による建築費の急騰を背景とする 1939 年 10 月から 1940 年 3 月までの「経営費の不足は四、

五百円見当と目される」⁽³⁶⁾と述べている。本項では、「津田子供の家」が経営費の不足をどこから、どのように補っていたのかを検討する。次表は、「津田子供の家」の1939年開所から1943年3月までの収入報告である。

表1-1 「津田子供の家」収入報告

(1939年9月26日-1940年3月31日) 決算		(1940年4月1日-1941年3月31日) 決算	
内訳	金額 (円)	内訳	金額 (円)
保育料	67.80	保育料	96.60
同窓会負担金	2,000.00	同窓会負担金	850.00
同窓会関西支部より寄附	176.23	学友会負担金	2,000.00
東京府助成金	1,200.00	東京府助成金	1,000.00
同窓会会員友教職員より寄附	338.60	寄附金	226.90
学生団体より寄附	40.80	雑収入	1.04
学校関係者を除く寄附	14.50	計	4,174.50
総収入	3,837.93	前年度繰越高	1,060.26
		総収入	5,234.80

出典：「同窓会会計報告」『会報』第49号（1940年7月），3頁，および「同窓会会計報告」『会報』第51号（1941年8月），29頁より作成。

表1-2 「津田子供の家」収入報告

(1941年4月1日-1942年3月31日) 決算		(1942年4月1日-1943年3月31日) 予算	
内訳	金額 (円)	内訳	金額 (円)
保育料	107.20	保育料	100.00
同窓会負担金	850.00	同窓会負担金	900.00
津田報国会負担金	1,000.00	津田報国会負担金	1,000.00
東京府助成金	1,050.00	東京府助成金	1,000.00
寄附金	171.00	寄附金	200.00
臨時収入	2.96	計	3,200.00
計	3,181.16	前年度繰越高	
前年度繰越高	352.37	総収入	3,200.00
総収入	3,555.53		

出典：「同窓会会計報告」『会報』第53号（1942年8月），22頁より作成。

一人当たり 20 銭の保育料は 1939 年の 67.80 円から、1941 年の 107.20 円まで増加しているが、1942 年は 100 円を保育料収入予算として計上している。収入のほとんどは同窓会と学友会の支援によるもので、同窓会は会員に対し会費や寄付を募り、学友会は映画会からの純益をもって「津田子供の家」を支援した。1941 年からは学友会とキリスト教女子青年会、消費組合が統合・一元化され、津田報国会が成立した。津田報国会は 6 部に分けられ、そのうち、銃後奉仕部が託児所支援を担当していた。

ところが、特に目立ったのは東京府からの助成金である。東京府は託児所設立時に 1,200 円を、設立後は毎年 1,000 円程度の助成金を支援した。1937 年厚生省社会局の「道府県に於ける私設社会事業奨励助成監督規程制定状況調査」によると、東京府私設社会事業団体奨励内規には、「助成金ヲ交付スヘキ団体ハ左記標準ニ該当シ次ノ条件ヲ具備スルコトヲ要ス但シ特殊ノ事業及標準ニ抛リ難キ事業又ハ附帯事業ヲ営ムモノニ対シテハ右ニ抛ラザルコトヲ得」と言い、「一 社会事業開始三年以上ヲ経過スルコト、二 将来継続見込アルコト」が条件として挙げられていた。また、一日平均乳児は 11 人以上、託児は 50 人以上が標準であるとされ、「助成金ノ額ハ最低参拾円」⁽³⁷⁾ とある。この金額が常設施設を指しているか、季節施設を指しているかは不明であるが、ただし、1933 年の中央社会事業協会による季節保育施設調査によると、一ヶ所あたり平均経費は 64 円 73 銭で、そのうち「道府県および市町村費補助が 22 円 26 銭」⁽³⁸⁾ であるという。これを踏まえると、常設施設と言っても、毎年 1,000 円という助成金は決して少なくない金額であることがわかる。当時「津田子供の家」の託児所委員であった三上加那は、「学校の附属といふので特別に奨励便宜」が与えられたと述べている⁽³⁹⁾。社会事業法の下で運営された託児所の拠り所として、東京府からの支援が機能していたことがうかがえる。

さらに、小平村の階層構成を確認するため、府民税あるいは町村民税の個別賦課額を税の総額に対して千分比にしてみよう。税の総額を仮に千円とし、10 円以上は上層、1 円 6 銭以上は中層、1 円 6 銭以下は下層であるとすると、1940 年の小平では、上層は 0.2%、中層は 4.1%、下層は 95.7% で、1945 年には上層が 0%、中層は 3.2%、下層は 96.8% であった⁽⁴⁰⁾。これは保育施設の起源とも関係がある。元々幼稚園は中層以上の家庭の教育を補うことがその起源で、託児所は下層家庭の救済と保護が起源であった。戦時期、約 97% を下層が占めていた小平の状況を考えると、津田英学塾がなぜ幼稚園ではなく厚生省管轄の託児所を小平に設置したのかが理解できる。

これ以外にも「津田子供の家」は、開所から 1 年後の 1940 年 11 月には、在籍児童数 59 名を記録し⁽⁴¹⁾、開所から 2 年後の 1941 年 8 月には在籍児童が、3 歳から 7 歳に至る男児 26 名、女児 34 名、計 60 名で、平均出席者数 50 名を 2 名の保姆が保育していた。当時の「保護者の職業は半数が農業」で、農繁期のような農村が忙しい時期に託児所が行った「副食物支給は非常に喜ばれるし、また幼児の健康上不可欠な事」⁽⁴²⁾ であったという。開所 3 年後の 1942 年 8 月には第 3 回の卒業式を挙げて、23 名の卒業生を国民学校に送ってい

る。70 余名の子どもたちが「毎朝通つて開設以来の大賑わひ^(ママ)」で、また、子どもの保護者達は「これ迄地附きの人が大多数で職業も農が多かつた」が、「だんだん他所から入つて来た人も増え、今年はじめに半島人の子供も入つて」いる状態に変わっていた。そして、「家庭の職業は農でも父は職工などいふのが可成ある様で、茲にも時局の反映が見られて」⁽⁴⁵⁾ いたことがわかる。

このように、「津田子供の家」が最初の「地付き」の農村託児所にとどまらず、1942 年からは朝鮮人を含む他所からの子どもの数を増やし、また保護者の職業も多様化させていたことは、戦時期の小平の人口と職業の変化をそのまま反映していた。また、その背景には戦時開発、すなわち「国策による施設と営団住宅の住宅建設に伴う」⁽⁴⁴⁾ 小平村への人口の流入があった。小平村には 1941 年に蚕糸科学研究所小平支所、1942 年には東部国民勤労訓練所、陸軍経理学校、陸軍技術研究所、参謀本部特殊無線通信所、そして 1943 年に電波物理研究所や陸軍兵器補給廠小平分廠と営団住宅が設立された。その結果、1944 年には人口が 15,595 名まで増加し、軍事化が進んでいた。

それでは、子どもの健康状態はどうであったのか。朝原は、「国策に順応する児童保護事業の根本観念は体位の向上」だと言う⁽⁴⁵⁾。その通り子どもの健康状態は「良好で（中略）全国の子供に比べて身長体重胸囲共に勝つて居」⁽⁴⁶⁾た。特に五月から六月のような忙しい農繁期には、子どもにおやつだけではなくお弁当の副食物も提供し、寒中の時は「お菜だけを家から持つて来させ」、御飯は託児所で炊いていたという⁽⁴⁷⁾。

表 2 1942 年在籍児保護者職業（1942 年 11 月 20 日現在）

職業	男	女	計
農業	11	15	26
職人	8	2	10
商業	4	4	8
職工	2	5	7
古物商	2	4	6
人夫工夫	1	4	5
勤人	9	5	14
建築請負	1	1	2
其他		1	1
合計	38	41	79

出典：蟹江操「津田こどもの家」の近況『会報』第 54 号（1943 年 2 月），11 頁より作成。

表3 小平村の人口の推移 (1931年-1944年)

年次	総数	世帯数	1世帯当たり人口	人口増加率 (%)
1931年	6,558	982	6.68	7.6
1932	6,725	1,019	6.60	2.5
1933	6,811	1,046	6.51	1.3
1934	6,441	1,068	6.03	△5.4
1935	6,581	1,055	6.24	2.2
1936	7,041	1,117	6.30	7.0
1937	7,200	1,123	6.41	2.3
1938	7,276	1,174	6.20	1.1
1939	7,276	1,174	6.20	0.0
1940	7,323	1,180	6.21	0.6
1941	8,226	1,303	6.31	12.3
1942	8,674	1,416	6.13	5.4
1943	12,657	1,502	8.43	45.9
1944	15,595	1,895	8.23	23.2

出典：1931年-1943年議会議事録（議会事務局），1944年食糧配給台帳，『小平市三〇年史』（小平市，1994年3月），190頁より作成。

表4-1 「津田子供の家」在籍児

	男	女	計
創立以来在籍人数	117	141	258
修了児数	36	35	71
現在在籍児数	38	41	79
年齢別 7歳	16	19	35
6歳	7	12	19
5歳	10	9	19
4歳	5	1	6

出典：蟹江操「津田こどもの家」の近況『会報』第54号（1943年2月），10-11頁より作成。

表4-2 昭和17(1942)年春季身体検査結果

年齢	所属	身長 (cm)	体重 (kg)	胸囲 (cm)	座高 (cm)
満6歳	子供の家	106.1	17.8	54.8	61.6
	全国平均	男102.8女102.4	男16.5女16.0	男52.7女51.9	
5歳	子供の家	103.1	16.0	52.3	60.0
	全国平均	男97.4女96.5	男15.2女14.5	男50.5女48.9	
4歳	子供の家	95.6	14.4	51.3	56.5
	全国平均	男91.7女90.0	男13.7女12.9	男49.5女48.6	
3歳	子供の家	93.0	14.0	51.0	55.6
	全国平均	男85.4女84.9	男12.4女11.5	男48.1女47.2	

出典：蟹江操「津田こどもの家」の近況『会報』第54号(1943年2月), 12頁より作成。

表4-3 1941年6月9日-14日(一週間の献立)

	献立
6月9日(月)	野菜煮込みと胡麻塩
10日(火)	玉子とち
11日(水)	小魚甘露煮と大根葉一夜漬
12日(木)	ゴジル 呉汁
13日(金)	五目豆
14日(土)	竹輪野菜煮付

出典：粕谷よし「津田こどもの家」のこの頃『会報』第51号(1941年8月), 15頁より作成。

食糧や物資が不十分であった戦時期にも拘わらず、「津田子供の家」の子どもの健康が良好で、しかも全国の子どもと比べても優っているのはどういうことであったのか。そこには、配給における便宜が与えられていた点を見逃してはならない。「副食物給与に関しては不自由のない様、村で醤油味噌砂糖特配の便宜をはかつて」⁽⁴⁸⁾ くれたと、当時の「津田子供の家」委員長の三上加那は述べている。さらに、農村という特性もあって、「農家からは野菜、魚屋さんからは魚といふ風に新鮮なものが^(ママ)に入るし、役場の特別臨時配給として醤油味噌砂糖等^(ママ)入要だけ頂けるので今でもちつとも不自由なしでやつて居」り、「おやつは府の社会事業協会から配給されるぱん菓子飴の他甘藷、じゃがいも、おにぎりの加工したもの、蒸パン、焼パン、ホットケーキなど工夫をしてやつて居」⁽⁴⁹⁾ たと保育主任の横澤は説明している。このように、食糧配給においても特配という名目で便宜がはかられてい

たのは、「津田子供の家」が東京府社会課と社会事業協会から持続的に支援されるほどの関係にあったためである。1939年10月の開所式で朝原が述べたように、戦時厚生事業として食糧増産に役立つ託児所の設置が打ち出されていた状況下、一つの託児所もない小平で、全ての施設と人材を備えた女学校が国策に沿って運営されるということは、「表面的には目立たぬ事業であるが、国花桜花の裏をなす梅花の」⁽⁵⁰⁾ ようなものだと期待されていた。

3) 「津田子供の家」と女学生

津田英学塾が託児所の設置を計画し始めた時期の詳細は不明であるが、1939年5月、同年6月開催予定の映画会の純益を託児所設置に使う計画を述べながら、映画会の会員券販売を督励する案内文を塾の寮に発送する。そして予定通りに映画会を開催、同年10月1日に託児所を開所したことを考えると、わずか3〜4ヶ月余りの間に急速に工事が進んだことがわかる。そこでは、津田英学塾の生徒である女学生の役割を見逃すことができない。本項では「津田子供の家」の設置過程と運営において、女学生を中心にとどのような勤労奉仕と役割が求められていたのかを検討する。

表5 女学生の勤労奉仕

班別	期限	日数
東寮班	7月11日(火) — 15日(土)	5日間
通学生第一班	7月16日(日) — 20日(木)	5日間
通学生第二班	7月21日(金) — 25日(火)	5日間
通学生第三班	8月27日(日) — 31日(木)	5日間
通学生第四班	9月1日(金) — 5日(火)	5日間
西寮班	9月6日(水) — 10日(日)	5日間

出典：蟹江操「塾の集団勤労作業に就いて」『会報』第47号(1939年7月)、2頁より作成。

1939年7月10日の学業終了後、生徒は通学生も教師もみな班別に分けられ、寮舎に泊まりながら、夏季集団勤労を実施することになる。

各生徒は必ず五日間寄宿舎に止宿し、二名乃至四名づゝの指導教師監督の下に班長、副班長及び各係を定め、十一より厳粛に勤労生活を始め

ている。生徒たちは、

朝五時半の起床より夜九時の就床まで、規律正しきプログラムにテニスコート草取

り、託児所の基礎工事（石運び、タコツキ）、硝子洗ひ（五番町で使ひ古した硝子障子がこんど託児所の戸になります）さては薯掘、食事の用意、舎内外の掃除⁽⁵¹⁾

などをやっていた。全校三百数十名が参加した当時の状況を『朝日新聞』は、「テニスやワーズワースの詩集代りにスキヤクワを握ってその一振り一つきに尊い汗の奉仕を続けてゐる」⁽⁵²⁾と述べている。

1939年7月11日から9月10日までの2ヶ月間に亘り行われた勤労奉仕で、女学生は託児所の基礎工事から食事の準備までを行う労働力として活躍した。託児所が設置されてからは「学生も毎週土曜日、農繁期は毎日放課後、勤労奉仕で保育を手伝った」⁽⁵³⁾。1941年5月、津田英学塾の教授であった藤田たき（1898-93）は、

学生の子供の家に於ける勤労奉仕は僅に二十数名が毎日二名ずつ交替して午後三時より四時に至る一時間子供等と遊ぶのと去年の夏休みに一人の学生が三週間、今一人が一週間働いたのに殆んどつきてゐる。誠に微々たるものである。然し乍ら一日たりとも子供の家で働いた学生はその経験を貴重なるものと考へ将来機会ある毎にその経験を深めたいと念願してゐる。（中略）文部省の新しき方針は農村に於ける労力不足を学生々徒の勤労をもつて補ふが為には学業短縮をさへもいと云ふ事である。現に年に三十日は授業日数を勤労にふりかへる事が可能なのである。この新条件による時津田英学塾の学生が農繁期に於て託児所の為大いに力をつくす事も出来る訳である。⁽⁵⁴⁾

と述べている。藤田は次第に増えていく女学生の勤労奉仕の可能性を、託児所「津田子供の家」を通して実現していくと語っていたのだ。

津田英学塾は英語専門の女学校だったので、学校のカリキュラムには保姆養成や保育と関連する科目はなかった。文部省は1932年、高等女学校の既設科目から、専門的な知識だけを授け実際生活に適切ではないという理由で「法制」と「経済」を削除し、代わりに公民科を設立した⁽⁵⁵⁾。また1936年からは体錬と教練、家事、裁縫が重視され、1943年には外国語が任意の科目となり、代わりに家政科に主力を注いでいた。こういう時局を背景にして、藤田は1941年の『社会事業』で、津田英学塾が「新学期より児童心理学を新たに学科内容に加へこの託児所を生徒の実験室とする計画をとつてゐる」⁽⁵⁶⁾と述べている。

実際に1941年の春から学科の変更があり、国語は週一時間、東洋史は週二時間増加し、新たに二年生を対象に児童心理学が週一時間、三年生を対象に科学の時間が設けられ、優生学と遺伝学を教えていた⁽⁵⁷⁾。それは戦時という時局において、銃後部隊としての役割が期待された女学生への教育であった。同時に作業の時間も設けられ、校舎、寮舎内外の掃除と、約千五百坪の畑への種まきと除草が女学生に課された⁽⁵⁸⁾。1941年3月18日に結成

された津田英学塾報国会は、前述のように銃後奉仕部を設けて映画会などを開催し、託児所援助や傷病兵慰問、出征軍人遺家族慰問なども行った⁽⁵⁹⁾。「津田子供の家」は1942年の時点で、二人の保姆と一人のお手伝い、そして塾の女学生が交替で手伝っていた⁽⁶⁰⁾。女学生は託児所の建設当初から建設の後まで、勤労奉仕という名目の下、労働力を提供し保育を補助する役割を果たした。また、保育報国が唱えられていた時代を反映して、学校の側でも児童心理学の科目が開設され、女学生には託児所がその実験室として提供されていた。

3 託児所「津田子供の家」を中心にする地域と学校の連繋

学校の近所の、ある農家で男の子が生まれた。

「良い坊つちやんね、大きくなったら商大へ入れるの」

「エエ津田子供の家へ入れるのですよ。はやくそうなつて来れいばよいのですが」

といった風に此辺の御母さん達は託児所に入れる事が御自慢であり理想でもあるのです。⁽⁶¹⁾

これは、1943年の『会報』に載せられた記事からの抜粋である。将来的には商科大学に進ませることを目指しているかもしれないが、この母親はまず「津田子供の家」に自分の子どもを入学させたいと願っている。では、小平という地域にとって「津田子供の家」はどのような存在であったのか。本節では「津田子供の家」が地域に与えた影響について、学校と地域の間における「津田子供の家」の役割を中心に分析する。

1931年9月、津田英学塾が小平に移転してまもなくのことであった。

アメリカ各地に於て小学校、女学校、大学がその村の、その町の所謂ソシヤル・センターである多くの場合を知つてゐた私達は津田英学塾がこゝに存在する事によつてこの村の文化向上の実があげ得らるゝ事をひそかに念願⁽⁶²⁾

していたので、当時東京で問題になっていた昭和恐慌以降の欠食児童について、地域との関係形成も意図し、小平村にある三つの小学校に「若し欠食児童があるならば援助させて頂き度い」と申込んだ。そしてその申込みに対する返事は、「欠食児童は一人もない」の一言であった。その後も地域のソーシャル・センターの役割を願っていた津田英学塾は、村の子どものために日曜学校を開いたり、一般の大人のために伝道会や、講演会、映画会を開いたりした。また、クリスマスには祝賀会を開き、村の子どもたちを招待した⁽⁶³⁾。しかし、そこには、「どうしても越える事が出来なかつた村の人等と私等の間のギャップ」⁽⁶⁴⁾があった。

ところが、「津田子供の家」が1939年10月1日に開所して1ヶ月が過ぎた時点で、過去

8年間、小平村民との間にあった壁が一気に崩れる変化が現れた。それは、託児所を媒介にした地域との交流が行われてきた結果であり、また地域に託児所が受け入れられていた証拠でもあった。村の人たちは津田英学塾の先生たちにお辞儀をし、津田英学塾の前の花屋は託児所に感謝の花束を2度も贈呈し、月謝支払いの日には収穫した薩摩芋を持ってきたりするなど、村民との距離が託児所を通して縮まっていた⁽⁶⁵⁾。また約1年足らずの託児所生活を終えて1940年3月29日に卒業した「津田子供の家」の第一回卒業生の親達は、託児所へ鉄棒を寄付した。これについて、1940年7月の『会報』には、

小学校に上りました廿名許りの児童はみんな模範生で小学校でも評判がよいさうでございます。此等の「卒業生」の親達が卒業の記念にと云つて託児所の庭に鉄棒を寄附してくれました。⁽⁶⁶⁾

と親たちと託児所との関係が述べられている。

「津田子供の家」は母の会の会員を含む地域の人たちを対象として、娯楽と文化と関連する催しも開催した。藤田は、「娯楽に乏しい村の母親等が子供等の遊戯や紙芝居に「ほんとうの芝居より面白い」と仲々立ち去りかねた等はあはれを催しました」と言い、母親たちにも「奉仕の手をのぼしたい」と述べている⁽⁶⁷⁾。当時の小平村の母親たちは外出と言ってもせいぜい「年に何回か実家へ帰る」くらいで、楽しみと言っても「水汲みの際のおしゃべり、つまり井戸端会議」がほとんどであった⁽⁶⁸⁾。1941年2月、託児所が設置されて2年程過ぎた時点で、「津田子供の家」は3月の農閑期を利用した幼児の母を対象とする料理講習会を3度開いている。

同窓会員で、栄養士としてその名を知られて居る森本喜代子さんに指導を願つて、栄養料理の根本についての平易な講義と、手近な材料を用ひての料理実習をした。出席者は二十名内外で託児の母、姉、祖母といふのが多く、皆熱心に、一々大きくなづき乍ら実習に忙しいひと時を過ごした。⁽⁶⁹⁾

とある。この講習会は戦時という当時の時局とも関係し、1938年に発行された『戦時婦人読本』では、「長期戦時代の主婦の力」の章の「^{じゃがいも}馬鈴薯の法律」や「^{はふりつ}台所の無駄で軍艦が出来る」という節で、じゃがいもの皮まで剥かないで食べるのが栄養食であり、台所の無駄を省くことが家庭における婦人の任務だと強調している⁽⁷⁰⁾。食材不十分な戦時期なので、普段より栄養料理への関心が高まり、特に豪華な食材を使うのではなく、農村のあちこちで手軽に手に入れるものを活用した料理講習会であった。料理講習会は時局に応じた催しであったし、このような側面において「津田子供の家」は、銃後の部隊である主婦を支える役割も果たしていた。

さらに「津田子供の家」は、社会事業協会からネルやタオルなどが配給されると、そのネルを利用して村の裁縫の先生に依頼し、ズロース制作の講習会も開いた。それを実費で分け、「お母さん達は品のよいものがお安く手に入り作り方を覚えたので大よろこびでそれ以来こども達はお揃のちやんとした下ばきを着て通ふ様に」⁽⁷¹⁾ になったという。

衛生的な面においては、津田塾所属の看護婦の手伝いで子どもの洗眼を実施し、さらに、外部から「東京医専（東京医学専門学校、現東京医科大学）の生徒さんが来て二日に亘つてツベルクリン反応の検査」を行って、「村の人々は今迄知らなかつた世界へ追々眼を開いて」いったという⁽⁷²⁾。『小平市三〇年史』には次のような話もある。

或る子供のおじさんが子供と託児所にやってきて、お弁当の前に手を洗うのを見て「はあ、水いたずらをしてしょうがないと思ったら、ここで習ったのか」という。そこで保母さんが水いたずらではなく、食事の前には手をきれいにしてお食事をするのだと説明すると、おじいさんは「そういうものかね」と感心した [。]⁽⁷³⁾

軍事都市化が進んでも衛生や都市文化とは縁遠かった小平で、「津田子供の家」は女学校の附属という利点を生かし様々な催しを行い、娯楽や文化の伝播を担い、また国策に順応した戦時託児所としての役割を果たしていたのだ。

最後に、「津田子供の家」がただ地域の人たちとの交流ではなく、上級学校である小学校（1941年6月から国民学校に名称が変更される）との関係も形成したことに触れたい。託児所はその言葉からもわかるように、貧困児童を「母親の労働時間内」に「委託」し、「乳幼児」を「保護」することが主な目的であった⁽⁷⁴⁾。家庭教育の補いを目的とするのは幼稚園であった⁽⁷⁵⁾。しかし小平村のように、幼稚園も託児所も無いところでは、託児所「津田子供の家」が幼稚園の教育の役割を全うした。

託児所の開所9ヶ月後の1940年7月の『会報』には、「朝七時半から登所して、お遊戯、お話、手工等を始めとして、お食事、おひるね、おやつ等の嬉しい事もあり、その後は花壇、畠に水をやる等をして、四時頃帰つて行きます」⁽⁷⁶⁾と保育日程が述べられている。託児所でありながら幼稚園の手技・唱歌・談話・観察・栄養という五つの保育項目を実施した「津田子供の家」は、1940年から毎年、卒業生を輩出し、さらに卒業生らは小学校で模範生として認められるような結果を生んでいた⁽⁷⁷⁾。また「津田子供の家」は小学校の運動会で遊戯を見せたり、「津田子供の家を出た一年生やそのお友達が毎土曜日午後やつて来ては本を読んだり運動したり」⁽⁷⁸⁾したとの記述もある。託児所を卒業し、上級学校に進学しても「津田子供の家」は子どもたちを受け入れてくれるところだった。卒業生が23名であった1941年は、「卒業児童の為に土曜の午後など「こどもの家」を解放して読書指導をして居」⁽⁷⁹⁾たという。また卒業生の中でも1940年に卒業した「国民学校二年生組は本を読む傍ら、幼児の午睡の時の手伝などをよくしてくれ」⁽⁸⁰⁾たことも記されている。

このように、「津田子供の家」が銃後の部隊を支える役割を果たしながら地域の変化を主導することができたのは、東京府や社会事業協会からの支援と、女学校という特徴を活かした学校の施設、在學生や同窓会などを活用して行った「衣食住の各方面に亘った生活指導」⁽⁸¹⁾が可能だったからである。

結びにかえて——「津田子供の家」の意義と限界

本稿では、1937年から1945年までの総力戦体制期に、津田英学塾が1939年10月から1945年4月末まで運営した託児所「津田子供の家」の設置と活動、および小平という地域における託児所の意味、さらに時局に応じた託児所の変化を分析した。

1939年設置当初「津田子供の家」は、地付きの農業の家庭が中心となっていたが、1942年からは軍事施設の建設開始に伴い「あらゆる階級の家庭に利用され」⁽⁸²⁾、一般農村保育施設とは異なる軍事都市の戦時託児所へと変貌していた。さらに時局に応じた種々の催しに見られる戦時色は、他の一般農村保育施設が戦時期に担った役割とあまり変わらない。

戦時期の農村託児所は恒久的な食糧増産のため、労働力補給と維持のために建てられた国策協力機関であって、「津田子供の家」もこうした点において戦時託児所の役割を果たしていた。しかし、全ての施設と人材を備えた女学校が設置・運営し、かつ軍事施設建設に伴い軍事都市化するという地域的特殊性を併せ持った「津田子供の家」は、単純に食糧増産と児童保護のためだけの機関ではなく、地域の中心に立ち、娯楽や衛生管理といった役割を主導していた。こういう面で「津田子供の家」が、娯楽や衛生・文化などを伝播した主体であったことは評価できる。しかし反面、主体的に戦争遂行を円滑にするための戦争協力的な部分を担い、地域からの協力を引き出す役割も果たしていた。

一般農村の大半には季節託児所が設置されていたが、小平の場合は最初から常設託児所として運営されていたので、地域に与えた影響は持続的で、体系的な変化をもたらすものであった。特に朝鮮人の子どもも通っていたことからわかるように、日本人と朝鮮人の間に「津田子供の家」を通じた生活上の交流、農業と職工などの多様化する職業に従事している村民同士の交流があった可能性も見逃してはならない⁽⁸³⁾。また〈小平市史〉や津田塾の『会報』には、「津田子供の家」が小平村民にとって「自慢であり理想でもある」⁽⁸⁴⁾とあるが、実際の村民の語りが記録された資料がないという限界もあり、その点については疑問が残る。

津田英学塾の女学生も労働力として、保姆の補助として、託児所の設置と維持に参加して勤労奉仕を全うした。当時「津田子供の家」に保姆として勤めていた宮崎氏は、保姆養成校に入った動機を、

女性も軍事工場などへ挺身隊として入ることが義務づけられていた。それから免れる

為に保母養成校に入る者が多く、小平あたりから比較的近い中野にある養成校(宝仙)に通った。⁽⁸⁵⁾

と述べている。

このような状況の中、英語専門の女学校であった津田英学塾は1943年に理科を開設し、学校名を津田塾専門学校と改めた。1944年3月からは、学校の校舎や寄宿舎が多摩陸軍技術研究所電波兵器練習部(通称東部第92部隊)によって使用され、体操場は立川日立製作所の学校工場となり、女学生は旋盤工として三交替、8時間の立作業や深夜業務が強要されるようになった⁽⁸⁶⁾。

「津田子供の家」は時局の悪化、空襲の頻発、食糧の窮迫に伴い、これ以上児童を預かることは不可能であると判断し、1945年5月1日、東京都宛に休業許可願いを提出した⁽⁸⁷⁾。

【注】

- * 史料の旧字体と異体字は、引用に際し新字体・印刷標準字体に改めた。
- * 引用文中の [] 内は引用者による補いを示す。

- (1) 小平町誌編纂委員会『小平町誌』小平町誌編纂委員会、1959年3月、427頁。
- (2) 同上、469頁。
- (3) 「津田子供の家」の表記については、津田英学塾同窓会が発行した『会報』では「津田子供の家」と「津田こどもの家」など筆者により表記が異なり、当時の「子供募集」のビラでは「津田こどもの家」、小平市史概要版作成研究会『小平の歴史——小平市史概要版』(小平市、2015年1月)でも「津田こどもの家」を使っている。本稿では、引用文を除いて「津田子供の家」という表記を使うことにする。
- (4) 矢治夕起「昭和戦中期の戦時託児所について——幼稚園から戦時託児所への転換事例①」『淑徳短期大学研究紀要』第53号、2014年2月、85-96頁。同「昭和戦中期の戦時託児所について——幼稚園から戦時託児所への転換事例②」『淑徳短期大学研究紀要』第54号、2015年2月、95-103頁。
- (5) 渡邊洋子「女性の労働と子育ての社会的基盤に関する史的研究1——農村季節託児所の発達経緯と新潟県における地域的取り組みの動向」『暁星論叢』43、新潟中央短期大学、1998年12月、19-44頁。
- (6) 田澤薫「昭和戦前期にみる児童施設の地域貢献——1933年三陸大津波被災地臨時託児所の実践から」『尚絅学院大学紀要』55、尚絅学院大学、2008年1月、79-90頁。
- (7) 中央社会事業協会は1908年設立の中央慈善協会が1922年に改称してできた団体で、救済などの社会事業のほか、戦時期には厚生事業に携わっていた。ここでの社会事業協会は、中央社会事業協会の地方団体である新潟県社会事業協会を指す。
- (8) 岡崎文規『戦時下の乳幼児保護問題』一元社、1943年9月、37-38頁。

- (9) 高岡裕之『資料集 総力戦と文化』第2巻(厚生運動・健民運動・読書運動), 大月書店, 2001年4月, 75頁。1942年10月14日開催の日本厚生協会主催「厚生運動指導者懇談会」における前大政翼賛会文化部副部長・上泉秀信(1897-51)の発言の一部。
- (10) 松久義平「高等女学校における保育実習について」『幼児の教育』第44巻第5号, 日本幼稚園協会, 1944年5月, 3頁。
- (11) 浦邊史「現下保育事業の諸問題」『社会福利』東京府社会事業協会, 1941年3月, 24-30頁。
- (12) 谷川貞夫「決戦下に於ける東京都の厚生事業」『厚生問題』第28巻第4号, 財団法人中央社会事業協会社会事業研究所, 1944年4月, 16頁。
- (13) 『小平の歴史』226頁。
- (14) 「ある市民の回想によると, 役場から「ハンコと謄本を持って集まれ」と声がかかり, 役場に行ってみると, 有無をいわず権利書にハンコをつかせたのだという。土地の代金として一律坪三円が支払われた。「山家では農地の六二%が失われたが, その補償として住民を經理学校の雇員として雇うことを陸軍に約束させた」。同上, 236頁。
- (15) 同上, 236頁。
- (16) 『小平市三〇年史』小平市, 1994年3月, 190頁。
- (17) 玉木直『私が見てきた保育の歴史——小平市を中心として』けやき出版, 1998年4月, 30頁。
- (18) 同上, 33頁。筆者が2015年7月27日, 玉木直氏に聞き取り調査をしたところ, 「津田子供の家」の設立以前の小平保育の状況について「親戚同士で預かるとか農家が多かったし, そんな感じだったのよ」と述べていた。
- (19) 同上, 8頁。
- (20) 同上, 13頁。
- (21) 1944年の人口が15,595人, 1946年の人口が13,557人で約2,000人が減少している。敗戦に伴い, 軍事関連施設の機能が停止してそれらに関係していた軍人, 軍属, 工具, 職員などの多くが復員, 失業で転出していったためである。戦時期における小平の人口増加の一部は, 短期滞在型の人口だったという。『小平の歴史』256頁。
- (22) 「託児所に就いて——報告とおねがひ」『会報』第47号, 津田英学塾同窓会, 1939年7月, 22頁。『会報』は, 一般公開をしない資料として, 津田塾大学図書館2階にある津田梅子資料室に保管されている。
- (23) 『津田塾会四十年の歩み』津田塾会, 1988年10月, 23-24頁。
- (24) 星野あい「ごあいさつ」『会報』第47号, 1頁。
- (25) 「託児所に就いて——報告とおねがひ」22頁。
- (26) 『津田塾大学六十年史』津田塾大学, 1960年10月, 233頁。
- (27) 同上, 233頁。藤田たきは, これに対して「年はか^へまる。日支事変は拡大の一途をたどる。戦線におくらの男子にか^へまる女子の銃後の任務は重大化した。学校に, 工場に, 鉱山に, 女の職場はひろがつてゆく。昭和十三年学友会催物の純益は上げて銃後奉仕の重要部門を僱^(マツ)ふ託児所に寄附する事が決議せられた。役員等は託児所見学に忙しかった。彼女等は託児所の実際を見, 或は感激し, 或は却つてその当事者の高踏的態度に苦々しさを覚えるのであつた。調査の結果純益を二葉保育園と敬隣園母子ホームに寄附する事に決定した」と述べている, 藤田たき「女子学生

- の勤労奉仕としての保育事業——津田子供の家の建設を中心として『社会事業』第25巻5号、1941年5月、66頁。
- (28) 後藤「学友会報告」『会報』第47号、11頁。これと関連して津田英学塾学友会は、1939年5月に、「聖戦下人手が少ないのにこの小平村には託児所がなく、困つて居ると聞きましたので一つ学生の私共の手で此の辺の子供達のために府下北多摩郡小平村小川託児所を立て上げやうと云ふ事に決めました」という内容の、映画会員券を1円券と60銭券に分けて販売を督励する案内文を塾の寮に送っている。「津田塾内部資料」No. 874。なおこの手書き資料は、一般公開をしない貴重書の一部として、前述の津田梅子資料室に保管されている。
- (29) 「託児所に就いて——報告とおねがひ」22頁。
- (30) 「託児所には左記の品々が必要です」『会報』第47号、30頁。
- (31) 『津田塾大学六十年史』234頁。
- (32) 同上、235頁。
- (33) 「津田塾内部資料」No. 879。募集ビラには、「申込^{しめきり}期日 九月二十日」とある。
- (34) 朝原梅一「託児事業の特質」『幼児の教育』第31巻第4号、1931年4月、8頁。
- (35) 同上、9頁。
- (36) 託児所委員会「お願ひ——重ねて託児所に関して」『会報』第48号、1939年11月、31頁。
- (37) 厚生省社会局「第七三回帝国議会社会事業法案資料」1938年、社会福祉調査研究会『戦前日本社会事業調査資料集成』第10巻、勁草書房、1995年4月、579頁。
- (38) 日本保育学会『日本幼児保育史』第4巻、フレーベル館、1971年、35頁。
- (39) 三上加那於「津田こどもの家」だより『会報』第53号、1942年8月、11頁。
- (40) 『小平町誌』735-36頁。
- (41) 託児所委員会「津田子供の家だより」『会報』第50号、1940年12月、43頁。
- (42) 粕谷(記)「津田こどもの家」のこの頃『会報』第51号、1941年8月、15頁。
- (43) 三上加那於「津田こどもの家」だより」11頁。
- (44) 『小平市三〇年史』191頁。
- (45) 朝原梅一「国策に順応する児童保護」『社会福利』第23巻第1号、1939年1月。
- (46) 蟹江操「津田こどもの家」の近況『会報』第54号、1943年2月、10頁。
- (47) 託児所委員会「こどもの家」だより『会報』第49号、1940年7月、3頁。
- (48) 三上加那於「津田こどもの家」だより」11頁。
- (49) 蟹江操「津田こどもの家」の近況」9-10頁。
- (50) 学友会后藤・岩尾「津田こどもの家」開所式の報告『会報』第48号、27頁。
- (51) 蟹江操「塾の集団勤労作業に就いて」『会報』第47号、2-3頁。「タコツキ(蛸突き)」は、胴突きという道具で土を踏み固める作業。「五番町」は、津田英学塾が小平へ移転する前の学校の所在地(現在の東京都千代田区)である。
- (52) 『朝日新聞』東京版、1939年7月27日、朝刊第6面[家庭]「休まぬ女学生：暑熱に鍛える(2)詩集に代る秋——託児所を造る津田英学塾生」。
- (53) 『津田塾大学六十年史』235頁。
- (54) 藤田たき「女子学生の勤労奉仕としての保育事業」70頁。

- (55) 櫻井^{まろ}役『女子教育史』増進堂, 1943年2月, 260-70頁。
- (56) 藤田たき「女子学生の勤労奉仕としての保育事業」70-71頁。
- (57) 星野あい「母塾の近況について」『会報』第51号, 2-3頁。
- (58) 同上, 2-3頁。
- (59) 同上, 3-5頁。
- (60) 三上加那於「「津田こどもの家」だより」11頁。
- (61) 蟹江操「「津田こどもの家」の近況」8頁。
- (62) 藤田たき「女子学生の勤労奉仕としての保育事業」66頁。
- (63) 「基督教女子青年会報告」『会報』第38号, 1933年8月, 72頁。「去年より引きつゞき毎日曜午前九時より校舎の一部を拝借して, 村の子供のために日曜学校を開いて居ます。出席者は只今四十名位。／六月廿八日午前七時より, 村一般の大人のために伝道会を致しました。(中略) 今泉原吉氏に講演を願ひ, 後の余興として『青い鳥』の映画を致しました。なほ例年通りクリスマスには村一般の子供等のために祝賀会を開くつもり」。
- (64) 藤田たき「津田こどもの家だより」『会報』第48号, 29頁。藤田たきは, 当時の状況を, 「津田英学塾は二万五千坪の校地を擁し, その鉄筋コンクリートの高雅な三階建の校舎, 寄宿舎はこの片田舎に宛も殿堂の如く聳えるのである。村人は校門に立ちつくし怪しげにこの建築等に眺め入り, 子供等は散策する生徒等を遠巻きにして何事か大声に罵るのであつた。確かに私達はこの静な村の平和をかきみだす存在であつた。道を歩いても, バスに乗つても私達はおほんとうに心から「今日は」と挨拶する事も出来なかつたし, またその挨拶にむくひられる事もなかつた」と述べている。藤田たき「女子学生の勤労奉仕としての保育事業」66頁。
- (65) 藤田たき「津田こどもの家だより」29頁。
- (66) 託児所委員会「「こどもの家」だより」2頁。
- (67) 藤田たき「津田こどもの家だより」29頁。
- (68) 玉木直『私が見てきた保育の歴史』8頁。
- (69) 粕谷(記)「「津田こどもの家」のこの頃」『会報』第51号, 1941年8月, 16頁。
- (70) 国民精神総動員中央聯盟編『戦時婦人読本』日本青年教育会出版部, 1938年5月, 1-4頁。
- (71) 三上加那於「「津田こどもの家」だより」11頁。
- (72) 同上, 11頁。
- (73) 『小平市三〇年史』202頁。
- (74) 保育研究部「託児所の沿革」『児童問題研究』第1巻第1号, 東京帝大セツルメント児童問題研究会, 1933年7月, 27頁。
- (75) 1925年4月21日, 勅令第74号。文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに株式会社, 1979年8月, 512頁。森川正雄編『幼稚園保育題材集——並幼稚園令及附属法令』奈良・森川正雄, 1925年7月, 1頁。
- (76) 託児所委員会「「こどもの家」だより」3頁。
- (77) 粕谷(記)「「津田こどもの家」のこの頃」16頁。「三年目といへば, 第二回卒業児について一言しよう。今年の三月には二十三名卒業した。(中略)「卒業」した子供達は, 昨年同様, 村の国民学校で模範生ださうである」。

- (78) 託児所委員会「津田子供の家だより」『会報』第50号, 43頁。
- (79) 粕谷(記)「津田こどもの家」のこの頃」16頁。
- (80) 同上, 16頁。
- (81) 託児所委員会「こどもの家」だより」4頁。
- (82) 蟹江操「津田こどもの家」の近況」8頁。
- (83) 『小平の歴史』259頁。
- (84) 蟹江操「津田こどもの家」の近況」8頁。
- (85) 玉木直『私が見てきた保育の歴史』35-36頁。「宝仙」とは、現在のこども教育宝仙大学の前身で、1935年に設立された仏教保育協会保母養成所(1939年に仏教保育協会中野保母養成所, 1944年に中野保母養成所と改称。1946年に中野高等保育学校, 1951年宝仙学園短期大学保育科となる)を指す。
- (86) 藤田たき『わが道——こころの出会い』ドメス出版, 1979年7月, 92頁。
- (87) 『津田塾大学六十年史』235-36頁。これと関連して星野あいは、「この閉鎖もほんの一時のつもりで、また復活したいと願っていましたが、やがて同種の保育園が村にも生まれ、その必要度も少なくなりましたし、いっぽう塾では教師館が不足をつけ託児所転用を必要とするなどの事情が生じたため、とうとう永久閉鎖になってしまいました」と述べている。星野あい『小伝』中央公論事業出版, 1960年12月, 91頁。